

月報

76号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 曦

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL(078)734-5989 FAX 735-0660

朝鮮民族運動史研究会第一一四回例会

(一九九二年五月一七日)

金元鳳の軍官学校について

鹿嶋 節子

金元鳳を中心とする義烈団が一九三二年から一九三六年にかけて運営し、活動家を養成した機関は、朝鮮革命軍事政治幹部学校、朝鮮革命幹部学校、義烈団政治幹部学校、朝鮮革命幹部訓練班などいろいろの名前で呼ばれているが、実質的には中国国民政府軍事委員会幹部訓練班第六隊として存在していた。この「幹部学校」設立に先立つ一九二九〜三〇年ころ金元鳳は北京で、朝鮮共產主義者安光泉と提携して朝鮮共產主義再建同盟を組織し、かつ「レーニン」主義政治学校をつくって青年を教育、朝鮮国内に派遣していたといわれる。そして、三一年の「満州事変」以降、蒋介石・国民党政府のある南京に本拠地を移して中国と結んでの活動を模索し始めた。

三一年に「中韓合作に関する建議」を中国側に提出、「満蒙問題を中心に軍事的団結を整」えることを訴え、その行動をになう闘士の養成機関設立を計画した。中国側も新たな対日工作の必要性を感じていた折から、朝鮮人と結ぶことを考え、また金元鳳らは以前から中国国民政府とも深いつながりを持っていたので朝中双方の考えが合致して中国国民政府の援助のもとに「幹部学校」が運営されることになった。

この訓練班では

第一期・三二年十月〜三三年四月、二六名

第二期・三三年九月〜三四年四月、(入学時四五名、卒業時五五名)

業時五五名)

第三期・三五年四月〜十月、(入学時四四名、卒業時三六名)

第四期・三六年三月〜、七名

の四期にわたって南京近郊で訓練が行なわれ、二十代を中心とする青年たちに思想教育、軍事理論教育、そして実際の軍事的訓練が施された。校長は、金元鳳。教官のほとんどが長い活動歴を持つ朝鮮人だった。卒業生たちは、新たな訓練生の募集や義烈団の支部組織の任務を帯びて各地に派遣されたが、目的を遂げる前に逮捕、拘束された者も多かった。

「幹部学校」運営と平行して中国在住の朝鮮独立運動団体をひとつにまとめようとする動きもあり、先ず各運動体間の協議機関として韓国対日戦線同盟が三二年十一月に結成され、三五年七月には、それを発展させて民族革命党が結成された。それに伴って、民族革命党に加わった李青天のグループに属する青年も「幹部学校」の訓練に参加するようになった。そうして、民族革命党の結成によって党の中にそれぞれ武装軍事活動、諜報暗殺、煽動宣伝等を担当する部門が作られ、訓練生たちも民族革命党に入党、それぞれの部に編入されるようになって、「幹部学校」という形はなくなっていく。

この「幹部学校」は「満州」や朝鮮に活動家を送り込んで組織を広げ、騒乱状態を作り出すという当初の目的を達成するに余りにも力が弱く、また中国国民政府の思惑に左右されて独自の動きがとりにくかったが、国外の地で祖国の独立運動をになつていける人材を育成するということは、運動の発展を考える意味で欠かせないものだったといえる。そして、この訓練の成果は、朝鮮義勇隊の結成、光復軍、あるいは朝鮮義勇軍の活動へと引き継がれていく。

(一九九二年六月十四日)

標識としての名前

「在日朝鮮人」の「本名」と「通名」

伊地知紀子

「在日朝鮮人」の多くは「本名」と「通名」を持っている。日本社会のなかでは、「通名」を使うことによって、「日本人」であるという暗黙の了解のもとで、住居や職を得たり商取引が成立する場面が多いからである。つまり、「通名」は、差別や偏見を調整する道具になる。名前という一人の人間を指し示す標識が、それを用いる場でたんなる標識であることを越えている。このような状況を生み出してきた力を問うために、日本と朝鮮、そして双方のかかわり合いのなかでの名前のありようをみていこう。

一般的に、日本の「氏」は同一戸籍の家族集団の呼称であり朝鮮の「姓」は同一祖先の男系血統集団の名称であるとされてきた。現在では、すべての人々が「氏」や「姓」を持つのは常識となっているが、遠い昔からそうであったのではない。日本でも朝鮮でも、近代国家が形成される以前は、名前を持つのは支配層の人々だけであった。特権として存在していた名前を、すべての国民が持つようになることは、一見平等であるかのように見えるが、そこには、戸籍への記載による管理という国家のもくろみがあったといえるだろう。

朝鮮では、李朝期儒教思想にもとづく男系血統優先主義が制度化され、「姓不変」に加えて「異姓不養」「同姓同本不婚」が定められた。二十世紀初頭一般の人々があまねく「姓」と「本貫」を持ち、族譜を形成することによって、「姓」は血統の

標識として「正当化」されていった。

日本では、十九世紀後半明治近代国家誕生の後、すべての国民に「氏」が強制された。戦前、日本の戸籍は「家」制度につながっており、「家」制度は家の諸制度の媒介項となった。それは、日本による朝鮮の植民地支配の道具にもなった。そして、「内地」「外地」双方で「日本人」をより強固に創出するために日常生活への規制を強いた。そこで隠蔽されなければならぬのは、「朝鮮人」の標識である名前であり、「創氏改名」の強要へとむすびつく。しかし、朝鮮の人々がそのような強制に対してただ従順であっただけではない。一族一斉に変えたり、本名をくみこむなどの抑圧のなかでの戦略があった。

当時、多くの朝鮮人の生活の苦しさは、抑圧の対象であることもあわせて、「日本人」であること／「朝鮮人」であることに、無根拠な「優／劣」の指標を与えることになった。このことは、戦後「在日朝鮮人」が、なおも「通名」でなければ生活できない状況を生みだしてきた。そして、それは日本で生まれ育った人々に「日本人ではない」という日本社会のまなざしを感じさせるものとなった。「本名宣言」は不安定解消の一つの回路になりえるが、それが「朝鮮人」の絶対条件になると、「帰化」した人や国際結婚で生まれた子供への新たな抑圧にならないだろうか。

考えなくてはならないのは、名前によって、ある生き方を強いる、あるいは強いてきたことであり、「在日朝鮮人」が日本社会で「本名」を名乗るということとは、それを強いてきた力を問うことなのである。名前を、つながりをつくったり、助け合いの糸口になるような柔軟なものとしてみていくことで「帰化」した人やその子供、国際結婚で生まれた子供へのまなざしも柔らかなものになるのではないだろうか。

日・韓キリスト教史研究会は分担して行ってきた。昨年は会員である徐正敬著の研究
発表と共に、共同研究の一助として翻訳『民族を愛した韓国キリスト者たち』(原題
『教会と民族を愛した人たち』)を共同訳で出版した。本年も各自の研究発表の間に提
て、韓国キリスト教史研究会(現在の韓国キリスト教歴史研究所)の新進気鋭の研究
者たちの共同執筆による『韓国キリストの歴史』II(一九九一、四五)の翻訳を分担し
て進めている。I(七〇、一九一八)はすでに数回に分けて読了しているが、IIをま
ず訳することとし次のような分担で翻訳を進めている。

序文・第二巻まえがき

韓 留曜

第七章 三・一運動とキリスト教

一、三・一運動とキリスト教

【一】三・一運動の背景

【二】三・一運動の展開

【三】教会の受難と意識

【四】社会変化とキリスト教民族運動

【一】総督府の政策変化

【二】社会主義運動とキリスト教

【三】国内独立運動

【四】国外独立運動

【一】教会の文化運動

【二】教会合同運動と連合事業

【三】教育事業

【四】教派別教会発展

海外宣教と海外韓国人教会の発展

【一】アメリカ

【二】日本

【三】満州、シベリア

【四】山東、上海、南京

第八章 転換期教会の自己模索

教会の内的葛藤と紛糾現象

【一】教派神学

【二】神学的葛藤

【三】分派の徴候

【四】宣教師排斥運動

教会の自治自立と復興運動

二、

韓 留曜

葉 寿龍

僧長 正義

李 省辰

韓 留曜

僧長 正義

担当者の訳文を全員で討議検討する方法がとられ、すでに第七章は五月に終り、秋か
ら八・九章にはいり今年中に終了、来春までに訳註挿入、年表の訳と日本語者に合せた
補充、索引などの検討そして訳文統一を経て成稿を出版社に送り、秋頃までには刊行し
たいと望んでいる。いまのところ訳者たちを困らせているのは人名、地名特に漢字のな
い中国などのハングル読みである。外国地、人名などの漢字の無いハングル表記は
問題と思われる。他国に対しては、自国の地、人名のハングル読みを求めながら、他国
のそれはハングル読みで平気では通らないであろう。妥協を求めたい。

【一】監理教会合同

【二】信仰復興運動

【三】自治自由教会分立

【四】朝鮮的キリスト教樹立運動

キリスト教民族運動と社会運動

【一】六・一〇万歳事件と新特会、復友会運動

【二】キリスト教徒の社会意識

【三】農村運動

【四】節制運動と社会事業

青年祝賀とキリスト教界

【一】長監宣教五〇周年記念事業

【二】天主教伝来一五〇周年

【三】教派教会成長

【四】キリスト教文化運動

第九章 日本帝國主義の迫害とキリスト教の闘争

民族抹殺政策とキリスト教

【一】戦時体制と民族抹殺政策

【二】宗教団体法

【三】日帝のキリスト教政策

神社参拝問題

【一】神道と神社問題

【二】神社参拝強要

【三】教会の対応

節操をすてたキリスト教

【一】キリスト教の受難

【二】キリスト教の親日行跡

【三】キリスト教会の親日行跡

キリスト教徒の闘争

【一】抗日民族運動

【二】民族文化守護運動

【三】神社参拝拒否運動

飛田 雄一

葉 寿龍

藤岡 幸子

蔵田 雅彦

蔵田 雅彦

後藤 聡

後藤 聡

新図書案内

朝鮮醫報 第1巻1號～第7巻4號	[1930～1937]	ソウル	P 2916
韓国齒科醫師論文總聚	奇 昌徳	ソウル	現代醫學社
王女福蘭胎室	翰林大学校博物館	ソウル	同 館
植民地期の朝鮮工業	河合和男, 尹 明憲	東京	未来社 P 207
日本基督教団年鑑 1992年 第43巻		東京	日本基督教団
舊韓末激動期秘史 알렌日記	H. N. 알렌	ソウル	檀國大学校
日本植民地下の台湾と沖縄	又吉 盛清	沖縄	沖縄あき書房
韓国分断史 資料集		ソウル	原主文化社
証言・朝鮮人のみた戦前期出版界	金 亨燦	東京	KK出版ニュース
韓国分断史資料集 I, II, III [1-3], IV, V, VI		ソウル	原主文化社
濟州新報 1947, 1, 1～1948, 4, 20		濟州	제주4.3연구소
抗日独立運動	朴 永錫	ソウル	探求堂 P 371
朝鮮中世紀史研究	朴 真, 姜 孟山	延吉	延吉大学出版社

研究会御案内

☆在日朝鮮人運動史研究会 第146回例会

日時 1992年7月12日[日] 午後3時

報告者 出水 薫氏

テーマ 「博多港からの在日朝鮮人の帰国の実態
ー博多引揚擁護局『局史』を手がかりに」

注意

青丘文庫

にて

合同で

します。

☆朝鮮民族運動史研究会 第116回例会

日時 1992年7月12日[日] 午後1時

報告者 藤永 莊氏

テーマ 「月尾島土地買収事件(1900年)について」

☆日・韓キリスト教史研究会

7月はお休み致します。

尚 8月はすべての研究会は、お休み致します。

水野直樹氏 壮行会 御案内

8月上旬に1年間の予定でハーバード大学研究員として渡米される水野氏の壮行会を下記の通り開きますので御参加下さい。

尚御出席の方は7月8日までに青丘文庫宛お知らせ下さい。

日時 1992年7月12日[日] 午後6時30分

場所 焼肉 かんてき TEL 078-578-0636

会費 3000円